或問　WAKUMON　135
No.33,（2018）pp.135-150

民間の遊歴詩人――柏木如亭

陳　慧慧

要旨：１８世紀江戸の都市文化の繁栄と共に、封建的身分制度の枠に収まらない都市の自由人が生まれた。彼らは遊歴という形式で文化を伝播しながら生活していた。故にそのような遊歴詩人は「官学派詩人」に対し、大衆文化から生まれついた民間的な、庶民的な性質を持っていたと考えられる。
そこで、本論文は遊歴詩人の典型―柏木如亭を取り上げ考察するものである。
キーワード：民間　庶民性　遊歴詩人　柏木如亭

はじめに

十八世紀後半には、漢詩の独立、文人趣味に伴うサロン（詩社）や商業経済の発達に伴いもたらされた文化の繁栄、及び五街道をはじめとする交通網の発達などによって、漢詩を作ることを職業とする漢詩人が生まれた。特に、安永・天明期になると、都市の成熟期を迎えた江戸は、豊かな消費文化も盛んになり、文化の中心が、伝統的な京都・大坂を核とした上方から新興都市である江戸へ移行するという現象、そして文学史学は文運東漸と呼ばれる広い範囲での文化の現象が起こりつつあった。そこで、都市文化の繁栄と共に、封建的身分制度の枠に収まらない都市の自由人が生まれた。彼らは遊歴という形式で文化を伝播しながら生活していた。故にそのような遊歴詩人は「官学派詩人」に対し、大衆文化から生まれついた民間的な、庶民的な性質を持っていたと考えられる。そこで、本論文は遊歴詩人の典型―柏木如亭を取り上げ考察するものである。

柏木如亭の民間性についての先行研究はほぼない。ただ、揖斐氏の『遊人の抒情―柏木如亭』には、[1]「(「除夜」詩の反俗は)「『木工集』の基底に流れているのは、この種の気分の変奏である。それらはいずれも、江戸の小市民である柏木如亭の日常的小世界における抒情を追求しようとしたところに、漢詩人柏木如亭と漢詩人『木工集』の新しさがある」という論述がある。その「江戸の小市民」という語彙は恐らく本論文に論じようとする如亭の「民間的」な性質に近いのではないだろうか。

本論文は三つの方面から如亭における民間的な性質について論じようと考える。まず、如亭の漢詩における自己意識。次に、当時大衆文化の中心であった江戸における江湖詩社と江戸漢

[1] 揖斐高『遊人の抒情―柏木如亭』（岩波書店 2006 年）　p 38

詩壇における性霊詩派についての再考察。最後に、中央から地方への文化伝播という時代の動きの中で、如亭はどのように地方の庶民や民間文学者と交遊しながら、相互に影響し合ったかについて述べる。（大衆）都市文化によって生まれた封建的身分体制の枠に収まらない自由な漢詩人が中央から地方への行動についての考察をもって、彼らの「官」に対する庶民性や民間的な性質が多少は明かになるのではないかと考える。

一、漢詩における自己意識

柏木如亭（(1763-1819）は、名は昶、字は永日、号は如亭である。江戸幕府に仕えた大工の棟梁の子である。如亭の生い立ちについては、[2]佐々木昌孝・中村武氏「小普請方大工棟梁柏木伊兵衛家の系譜」という論文には詳細的に論じられた。京都永観堂前に如亭の墓碑が建てられている。親友葛西因是の筆跡が書かれている。

山人四方客遊、其跡多在信濃越後、又在平安備中間。其在北忽又在南又在西。数年間時有歸江戸。歸輙数過我、叙旧款談唐詩。去則辞別。文化支干冬歸来、一再訪。不辞去、其不知所在。不見山人四五年、或伝在越後、或云在伊勢。文政己卯(二年)聞其訃音。云、七月幾日得病卒平安寓居、葬鳥部山。行年五十七歳。方支干一見知其永訣。嗚呼哀哉。

山人家世以木匠受征夷府俸米。又毎受直任役、余有嬴、自不乏衣食。山人棄不事。邦俗山野之人不尚文墨。山人強治吟詠書画。唯恐価不高。所得潤筆尽揮之、狭斜噉啖、魚肉非嚼大塊不飽。風月之遊、老不減少壮。衣服斬新、務務逐時世。雖不嗜酒，好與嫖客歌娼混坐，時時作戯劇打渾之語。蓋色食成性，天真爛漫，人亦無以此是疵山人。

上述から、如亭の経歴がほぼ分かる。世代江戸幕府に仕える大工の棟梁であるが、後役職を棄て、遊歴詩人になった。信濃地方への遊歴は一番多くて、五十七歳の時京都で客死した。如亭は一生を遊歴しながら、詩集『木工集』、『如亭山人遺藁巻一』、『如亭山人遺藁巻二』、『如亭山人遺藁巻三』と随筆『詩本草』を著した。

如亭は漢詩によって自分の反俗と反儒の気持ちが強く伝えられている。

１、反俗性

[3]揖斐氏は『遊人の抒情―柏木如亭』に『木工集』「除夜」という漢詩について、「世間の人々は旧年を送り新年を迎えようと、肩をぶつけ合いながら忙しく往来している。そんな俗世間の動きにことさら背を向けるかのように、如亭は家に閉じこもり、人との交わりを避けて、ひたす

---

[2] 佐々木昌孝・中村武氏「小普請方大工棟梁柏木伊兵衛家の系譜」

[3] 揖斐高『遊人の抒情―柏木如亭』（岩波書店 2006 年）36-37 頁。

ら舶来の怪異小説集を読み耽っている」という解釈から、如亭の反俗が洞察できる。[4]揖斐高氏は『木工集』の基底に流れているのは、倦怠、反俗と憂鬱らの気分の変奏であると述べるように、『木工集』の「莫笑」もその反俗性を表わしている。

莫笑江湖哀意思。江湖社友句清新。風流到底非官事。多少詩人半野人。

陸游も「莫笑」「莫笑窮閻叟，人生亦已稀。众中容后死，険処得先帰。初服還韋布，晨餐美蕨薇。床頭周易在，舎此復畴依。」という詩が書いた。如亭の「莫笑」と陸游の「莫笑」の基底は同じく、仕官せずに在野の生活を自分なりに楽しく送っているのだと世に伝えているように思われる。「江湖」は中央の朝廷に対する地方民間の意がある。ここでは、江湖詩社をも指している。「清新」とは、清らかで新しい。ここでは、江湖詩社は明・清の両袁の性霊詩風を唱えることを指摘する。「風流」とは、みやびやかなこと。趣のあるさま。詩人は半分野人でるという句から見れば、如亭が追求している風流は詩人なのである。「野人」という語彙は『詩本草』終章となる第四十八章「昔人云はく、古の山人は山中の野人、今の山人は山外の遊人なりと…知らず、幾時か衣食ほぼ足ることを得て、長く山中の野人とならんか。噫。」にある。如亭は自分が山中の野人になりたがったけれども、結局山外の遊人になったのだという山中野人への憧れがみられる。如亭の隠逸性も読み取れると思う。風流は到底官事ではないという嘆きから、如亭の官職を棄て遊歴詩人なったことが納得できるようになる。「老夫不是求官者，只愛平安城外花」（「還京城寓所」、一領公衣俗了人（「山水図に題す」）という詩句の説いたように、如亭にとって、「官事」と「風流」とは正反対で、俗な「官事」を棄て、風流な詩人野人こそ自分の志向であるのだろう。ここでの「野人」には、「官事」に対する在野の意味も含まれている。

また、文化十一年（1814）の後に作られた「賀龜研古得子」にも反俗反儒の精神が流れている。

昨夜閨門神授筆。今朝早報老夫聽。是書種子非庸物。休道國家添壹丁。[5]

揖斐高氏の訳注によると、亀研古は三河国吉田の人、修姓は亀、名は遜、字は脩来、号は研古。『海内才子詩』に詩一首が収録される。亀研古は神から文筆に長じた子供が授けられ、その子は知識人の血を受け続いで生まれたので、凡庸な人間ではない。国家のために一人が増えたと言ってはいけない。要するに、如亭の考えでは、知識人は必ずしも国家のために官職に仕えるわけではなく、しかも官人はイコール平凡な人という認識は当時の社会においては、非常に反俗なことである。村瀬藤城に書かれた『詩本草』の跋文に「山人常下視世儒、不翅草芥」から、山人

[4] 揖斐高『遊人の抒情―柏木如亭』（岩波書店 2006 年）37 頁。

[5] 揖斐高訳注『柏木如亭詩集 2』（平凡社 2017）153 頁。

は朝廷に仕官する儒者を軽視していることが看取できる。

２、隠逸性

周知のことで、文人の反俗性に伴うのは隠逸性である。上述の「野人」という論述においては、如亭の隠逸性について既に言及した。 また、如亭の漢詩にもその世俗を離れ、山水に寄せる隠逸志向が託されている。

「春寒」

連日春寒擁帝城。鴨河壹帶凍無聲。高臥關心只花事。東山時節近清明

『如亭山人遺藁巻二』

詩集には文化十年（1814）以降に書かれたものと記載されているため、恐らく如亭文化十一年江戸に帰着後間もなく、十二年の四月また江戸を発って信越地方を遊歴し、漸く文政元年（1818）一月京都に帰り着いた後の作品であろう。「高臥」とは、『晋書』謝安伝に、「卿屡違朝旨、高臥東山」により、隠逸して仕えないことを指す。「東山」は京都の花見の名所東山のことであるが、[6]揖斐高氏の注によると、謝安の東山をも意識していたという。春の寒さが連日京都を包み、鴨川は凍結して音も聞こえない。隠逸しているので花見のことしか関心がない。東山に行楽に出かける清明節は間もなく近づいてくるのだ。とりわけ、頷聯の「高臥　心に関はるは只だ花事のみ」から、如亭は隠逸生活を楽している気持ちが読み取れる。また、

「題畫」

訪隱人間客。胡為頻四顧。深居到不得。白雲埋去路。山居喧難免。幽徑有來人
何似浮家子。眼無壹點塵。山中來閉戸。歲月著書新。不向城門入。衣冠構束人
身外皆詩料。秋林獻好箋。幽人袖手立。不覺袖將穿。壹作雲林主。巖窗不見塵
非嫌有花樹。恐引世間人。朝寫水墨盡。夕寫淺絳色。目未覩古人。雲黄倪筆墨
水墨最是上。何須借采飾。吾筆無壹塵。吾墨有五色。似是鄕關路。山川數十程
憾難容步得。壹枕夢中行。三間靠壹峰。捐捐籬外水。山雨時欲來。冷雲飛屋裏
欲訪秋山水。老人唯怕寒。不如壹枝筆。自己畫來看。筆頭我有錢。世人何得解
不依於氏力。好山任意買。山人雖在外。到處愛登山。連朝風雨惡。閉戸畫孱顔

如亭の遺稿集には、題画詩は十首ほど多い。當時詠物詩と題画詩が多く詠まれたのは、詩社の集まりでは、あるものを主題とすれば、創作しやすいから。また、生活のため、遊歴詩人は画家

[6] 揖斐高訳注『柏木如亭詩集2』（平凡社2017）152頁。

と交遊しながら、画家に絵を学ぶことは多い。如亭も画家勾田臺嶺と親交を結び、彼に絵を習った記録がある。題画詩の内容はほとんど隠逸の生活を描いている。上述の題画詩においても、深山に生活している隠士の生活が書かれている。「花有るの樹を嫌ふに非ず、世間の人を引くを恐る」という詩句は陶淵明の『桃花源記』を踏まえて書かれたと考えられる。如亭の反俗心境をも窺える。また、最後の「山人　外に在りと雖も、至る処　山に登ることを愛す」から、強く隠逸の志向を示していると思う。如亭は自ら「山人」という号をした心境はここでの「山人」とは一致しているのではないかと考えられる。

３、（江戸小市民的な）詩人意識

この節には柏木如亭における江戸小市民的な詩人意識の考察は揖斐高氏の説を踏まえて論じるものである。[7]揖斐氏によると、如亭は庶民の日常生活を漢詩の素材として、小市民的な漢詩世界を作るという。

まず、如亭の詩人意識について述べようと考える。如亭はずっと漢詩人という自己認識している。しかも、漢詩への執着心は強い。

> 録詩必用細楷、如謹勅書生、集中所載自叙写者意態各別、読者可以知其尽非虚構焉、襄曰、山人之詩論法極密、自誇一字不苟、而其中自有一種疎爽俊抜之気如其為人者…「如亭山人遺藁序」

上述は頼山陽が書いた『如亭山人遺稿』の序文である。下線の部分に、如亭は漢詩を記録する時、必ず小さな楷書で書き、遊蕩の時と正反対で真面目な書生に一変したと述べた。また、葛西因是が書いた『如亭山人稿初集』の序文にも「余與山人相識三十年，其人世為官匠，少不事生產，放情于煙花風月，混跡于遊俠俳優，喜友真率灑脱之人，寇視修邊幅之徒…履行多不中繩墨，顧獨自嗜吟詠，苦思求合格」と如亭の漢詩への真面目さを述べていた。更に、「凍了詩身移不肯。吟哦聲裏倚闌幹」（「樓上雪霽」）や「老來事事盡癲狂。但有吟詩不肯忘。」（「「逢木百年」）などの漢詩から、如亭の漢詩にたいする情熱が感じられる。そこで、如亭の漢詩人という自己認識が非常に強烈である。それは、当時漢詩は儒学から独立して職業詩人できる環境ができたからこそ得たことである一方、繁栄していた経済の発達に伴う都市文化から生まれた庶民意識の高揚にも繋がっているのだと考えられる。如亭の漢詩における庶民的な且つ商業的な特徴によって洞察できると考える。例えば、

「寄題菅伯美所居」

居自幽閉極。詩人得意場。痴僧月敲戸。鮎鼠昼窺堂。

---

[7] 揖斐高『遊人の抒情―柏木如亭』（岩波書店 2006 年）38、42 頁。

鶴却推形瘦。茶還讓句香。餘生捐世事。占断箇柴桑。

菅伯美は江湖詩社の詩人で高崎藩士の菅谷伯美である。伯美は寛政二年（1790）に高崎藩の飛地があった武蔵国野火止村に左遷された。ここでの「所居」はその野火止村の住まいである。「痴僧　月に戸を敲き」という一句は唐の隠逸詩人賈島の「僧は推す月下の門」か「僧は敲く月下の門」かについて苦吟するという故事を意識して作られたと考えられる。全詩は世俗を捨て隠逸生活を楽しむ主旨であるにもかかわらず、庶民生活の匂いもしている。例えば、ずる賢いネズミは昼間から姿を現したり、お茶を楽しんだりすることは非常に庶民生活に近い。ネズミという日常生活の俗物を漢詩の素材として使われるのは宋詩風の現実主義の味がある。しかも当時江戸漢詩壇の流行に適合したと思われる。また、如亭の漢詩には美味についての描写が多い。例えば、『詩本草』はその飲食と漢詩と完璧に結合させる典型である。「錦様佳魚堪斫膾。不妨一見把囊傾。為湯来喫骨辺肉。幽味多于睡五更」という詩は、如亭は美味しい鯛を味わうことを描いている。そういうことできるのは、商業資本の発達と都市文化の繁栄所以である。さらに、これを裏づけるのは、如亭の漢詩における都市文化の繁栄への描写である。

「三日飲四日市海樓」
東風吹海水搖蕩。桃花三月魚兒長。此時不醉待何時。花岸酒樓盡可上。
萬頃瑠璃忽遠移。正是三日潮退時。銀屋頽盡雷鼓絕。扑鼇呑鯨亦何之。
但見盤餐列海錯。對此如何得不樂。我生海國甘海味。一醉不須嘆流落。
更思霜蟹擘玉淨。我同湖上李氏性。要待秋風重相訪。亦有青錢名買命
（李笠翁嗜蟹于其未出時儲錢以待呼為買命錢）[8]

揖斐高氏の注によると、上述した漢詩は文化五年（1808）三月三日の作であるが、『如亭山人題跋』には「丁卯の年、余初めて浦霞に遊ぶ。吉鳳奴諸子相従ひ、詩酒虚日無し」とあるので、四日市の門人吉田蓉浦らとすでに前年の丁卯文化四年（1807）に霞ケ浦に遊んでいたことであるという。また、『詩本草』第十五段には、「勢の霞浦の魚蟹美なりと聞きて、往きて遊ぶ。三日、海楼に登り、古風一篇を作る」と題してその作をも収めている。詩文から春風が吹き渡って海面が揺れ動き、桃の花の咲く三月に、如亭は岸辺の酒楼に登って、海景色を眺めながら海産の珍味を楽しむという極楽世界のイメージが伝わってきた。四日市は市場町で、文字通り毎月「四日の日」に市場が開かれるようになったので、四日市と呼ばれる。また、桑名につぐ東海道五十三次の四十三番目の宿場町として有名で、伊勢商人の集め地としても栄えた。如亭の漢詩は、そのように繁栄していた四日市の一つの側面であると見られる。当時伊勢よりずっと栄えていたのは

[8] 揖斐高訳注『柏木如亭詩集 2』（平凡社 2017）31 頁。

越後の新潟である。寺門静軒の『新潟富史』には当時新潟の豊かさについて描かれているように、如亭も新潟遊歴の時、その地の繁栄について漢詩で記録した。

八千八水帰新潟　七十二橋成六街
海口波平容湊舶　路頭沙軟受游鞋
花顔柳態令人艶　火膾霜螯著酒懐
莫道三年留一笑　此間何恨骨長埋

揖斐氏の『柏木如亭年譜』によると、如亭は寛政十年（1798）秋から翌年春にかけて越後国新潟に滞在したという。信濃川の多く支流は新潟で合流して海に注ぎ、多くの橋は町に架けられていた。海辺の港に多くの船が泊まり、、柔らかい砂が旅人の靴を受け止めていた。遊里の美人は花のような顔と柳ような姿は、人を艶なる心持にさせ、火のように赤い鮭の刺身と霜のように白い蟹は、酒を飲む気を起こさせた。この詩は商業発達している下町の風景を生き生きと描写している。

二、江戸の漢詩社と漢詩壇

１、性霊詩派

18 世紀後半の漢詩壇においては、古文辞学派の擬古主義に対抗して性霊詩派・宋詩風が巻き起こした。漢詩は儒学と共に日本に伝わってきた。江戸初期には、林家の朱子学に伴い、朱子学の風雅観という詩観が建てられた。朱子学における風雅観の依り処は『詩経』である。「詩者，人心之感物而形於言之余也。心之所感有邪正，故言之所形有是非。惟聖人在上，則其所感者無不正，而其所言皆足以為教。」（『詩集伝序』）朱子の『詩集伝』によると、人の心が物事を感じる時言葉で表すのは詩である。心の感ずるものは正邪の分別があるが、聖人を常に心に刻まれば、感ずるのは正であり、そのような詩は教えになる。それはやはり、詩の載道説である。また、「惟周南、召南，親被文王之化以成德，而人皆有以得其性情之正，故其發於言者，樂而不過於淫，哀而不及於傷，是以二篇獨為風詩之正經。」（『詩集伝序』）とあるが、詩における性情の正しさを重視していることが見られる。『詩集伝』の『大序』には、「吟詠情性以風其上，達於事變而懐其舊俗者也。故變風發乎情，止乎禮儀。發乎情，民之性也；止乎禮儀，先王之澤也。是以壹國之事，系壹人之本，謂之風。言天下之事，形四方之風，謂之雅。雅者，正也，言王政之所由廢興也。政有小大，故有小雅焉，有大雅焉。」（詩集伝・大序）があるように、性情を吟ずるには風と雅は最も重要である。そこで、伝統的な儒教詩観としての朱子學の詩観は性情之正を重視する風雅観なのであることが分かる。

しかし、17 世紀後半江戸には伊藤仁斎の古義学と荻生徂徠の古文辞学が起こった。漢詩の儒学から独立される行動もその二つの學派と深く関わっている。古義学の『読詩要領』には、「詩

のことばはさまざまなれども、道人情といふの一句にてつづまることなり」とあるように、詩は人情の表現であるという教えは、漢詩における人情を肯定した。つまり、漢詩を儒学あるいは朱子学の載道説からある程度分離させた。また、伊藤仁斎は「人倫日用当に行くべきの路」（『語孟字義』）と述べた。つまり古義学の主要な実践課題は日常生活における人道である。そのため、古義学は、朱子学的な風雅観においては「雅」に対立するものとして否定的な意味しか持ちえなかった「俗（日常的な卑俗さ）が、逆に肯定的に捉え直されることになり、「蓋し詩は俗を以て善しと為す。三百篇の経たる所以の者も亦たその俗を以てなり」『古学先生文集』巻三「題白氏文集後」」。[9]揖斐氏『江戸詩歌論』に「このような人情と俗の積極的な肯定という特色は、西鶴の浮世草子や近松の浄瑠璃など、いわゆる元禄文学の特色と大きく重なりあっている。古義堂の人情論的文学観は、漢詩文の世界だけのものではなく、元禄期の文芸界を広く覆ったヒューマニスディックな文芸思潮の理論化という側面をも併せ持っていたことになろう。」と述べたように、伊藤仁斎のその人情と俗を肯定するのは元禄という時代環境に深くかかわっているのだ。元禄時代においては、産業の発展は目覚しく、新田開発や農具の改良で商品生産が増大し、貨幣経済の浸透によって、都市生活も向上したとともに、新興町人が進出し、町人文化が開花した。そのため、仁斎の多くの門人も市井階層と庶民階層である。

しかし同時代の徂徠学は儒学の政治実用論理によって、徳川綱吉の信頼を得て重用されたため、徂徠学が一時世に風靡し、彼が提唱した「詩必高唐、文必秦賦」という擬古主義の作詩方法も流行し始め、当時の漢詩壇を占めた。勿論、徂徠学の弟子服部南郭らの「予は決して経済のことを言わず」という漢詩を専門にする職業詩人も漢詩を儒学から独立させたにもかかわらず、[10]揖斐氏によると、「彼らの裏におそらく儒教的な価値に裏付けされた士大夫的な自我とでもいうべきもの、を実現しうる世界が現実に存在しないことを知ったので、自らその実現を断念し、虚構された擬古的な漢詩の世界に士大夫的な自我を充足させよう」という考えが潜んでいた。要するに、古文辞学派の弟子たちは漢詩の独立に努力したが、その漢詩観相変わらず儒学伝統的な風雅観から脱出されなかった。

徂徠学の擬古主義は江戸漢詩壇の主流を占め続き、18 世紀後半になると、ようやく山本北山は『作詩志殻』を以て、古文辞学派の擬古主義を反対し、袁宏道と袁枚の性霊詩派と宋詩の写実主義を提唱した。性霊詩派は漢詩における「我」、「真」、「新」、「奇」を重視し、自分の気持ちを誠実に述べるのは最も重要であるという詩観である。その背後に支えられていたのは、田沼政権のもとに発展された商業経済につれての繁栄した都市文化と増えた農町人層によっての個人主義と現実主義の浸透であるのではないかと筆者が考えている。18 世紀後半から巻き起こった性霊詩派はおそらく庶民階層や市井階層の増大によるものであろう。遡れば、その地下水脈は

[9] 揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院 1998 年）16-17 頁。

[10] 揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院 1998 年）22 頁。

まさか17世紀の古義学における人情と俗への肯定に隠れているのではないだろうかと筆者が推測した。漢詩は儒者だけのものではなく、だれでも漢詩を作れるという朱子学や徂徠學における儒教的な風雅観の枠から解脱しようとする庶民階層や市井階層の訴えは、性霊詩派の詩観によって得ようのではないかと筆者が考えている。性霊詩派の実践者は江戸の市河寛斎を盟主とする江湖詩社である。柏木は寛斎の得意の弟子であり、性霊詩派の実践者である。例えば、頼山陽『論詩絶句二十七首』には「柏昶為詩有別才，空腸直吐性靈來」と如亭を評価したし、『寛斎先生余稿』「董齊印譜序」にも「永日（如亭の字）之論詩云、詩者心之声也。人心不同非如其面耶。以不同之心発之所遇之異。故李・杜・王・孟・元・白・皮・陸、各異其體、降而宋而元明、絶無有模擬剽窃之跡、是謂之各成一家言矣。方其一家言始出也、世人見以為新奇、為怪癖。諸公甘受其誚、百年而論定。」という評価がある。『隨園詩話』に「凡作詩者、各有身分、亦各有心胸」とあるため、如亭は『隨園詩話』に大きく影響されることがわかる。また、文化元年、神谷東渓録と如亭は袁枚の『隨園詩話』を校閲して出版した。その序文は如亭が撰したものである。

２、江湖詩社について

江戸の江湖詩社は当時明清の両袁が提唱した性霊詩派を以て、古文辞派に対抗することによって有名になったという。江湖詩社に属した詩人のなかでも、柏木如亭、小島梅外、大窪詩仏、菊池五山の四人が主力で、彼らはみな詩人ではあっても儒者ではなかった。儒者の家に生まれた五山は別として、如亭は幕府の大工の息子であり、梅外は富裕な商家の生まれて、詩仏は医者の息子である。そこで、江湖詩社の性格について再考察する必要があると思う。まず、江湖詩社盟主である市河寛斎の『寛斎漫稿』「源温仲先生に与ふ」を見てみよう。

①社名江湖、これを宋人の流派に取る。曰く、吾輩は朝に座せず、宴に与らず。幸いに大平の世に生まれ、含鼓の沢に沐浴す。②即ち知道の庶人為るを得ば、即ち足れりと…

③昌平辞職の後、東郊の外に跧伏し、君子の交はりは絶え、生徒は日々に謝す。ここにおいて大いに力を好む所に展べ、一二の従遊の士と吟社を盟結し、日々以て娯楽と為す。…或いは謂ふ、詩風の変は江湖詩社より始まると。

①の部分には、江湖詩社の名は宋代の江湖社という民間文人集団から取ったということが述べられた。『新漢語林』に「江湖」とは、世間と中央の朝廷に対する地方民間の意がある。要するに、市河寛斎も自分の江湖詩社を民間的なものと定義したことがわかる。それは、②と③によってさらに明解されると考える。②の部分には、「庶民」という自分定義が見られ、③の部分には、昌平黌での役職を辞めてから、郊外で君子との交わりを絶ち、ただ何人の遊士と吟詩を楽しむことが述べられる。

ここでは、「君子」と「従遊の士」と正反対の一対概念が提出された。『広辞苑』に、「君子」

とは、①高い身分の人;②人格が立派な人、徳が高くて品位の備わった人という二つの解釈がある。『新漢語林』に、「君子」とは、①学徳のある立派な人。用例としては、『論語・雍也』「文質彬彬、然後君子;②官職にある人;③君主、為政者。「遊士」の解釈ないが、『新漢語林』には「遊」とは、①あそぶ。好きなことをして楽したり、旅をしたりする、あちこちを巡って説く。用例としては『漢書・儒林伝』「七十子之徒散遊諸侯」がある。②友達、友人③ただよう、さまよう。「士」とは、①職務、事を処理する才能のある人。例えば『論語・述而』「富而可求也、雖執鞭之士」②こととする。従事する。例えば、『詩経・幽風・東山』「制彼裳衣、勿士行政」③役人、兵士。④立派な人。学識・徳行のある人。また、学問・知識によって身を立てる人。『論語・泰伯』「士不可不弘毅」という用例がある。そこから、「君子」と「士」とは、同じく学徳のある立派な人という儒教的な解釈があることが見られるが、「君子」は官職にある人をも指すことができる。また、ここでは「遊子」の「遊」は好きなことをして楽しむ意味をとれば、適合だろうと思う。

要するに、上述した「遊士」は、官職にある学徳の人である「君子」と対立し、好きなことをして楽しむ学徳がある人を指していると考えられる。市河寛斎はもともと昌平の役人で、今役職を辞めて好きな吟詩を楽しむため、上述した「遊子」の解釈にふさわしいのだろう。しかし、後の「大いに力を好む所に展べ、一二の従遊の士と吟社を盟結し、日々以て娯楽と為す」という記述から、市河寛斎は「遊」に傾くことが見られる。彼は「君子」という官人や儒教意識などから脱出しようとする気持ちが読み取れる。それは、①の民間詩社の定義と②の「庶民」に満足することに通じるのでしょう。

次に、天明７年に市河寛斎は辞職後湯島から両国矢倉に居を移してから、江湖詩社を成立する端緒の詩文を見てみよう。

放擲昌平啓事名。煙波近処占幽情。江湖結社詩偏逸。木石成居趣亦清。
白首人間争席罷。青雲世外振衣行。扁舟乗月誰相訪。門静寒潮夜夜声。

『寛斎先生遺稿』巻一「矢倉新居の作」

上述の漢詩は、市河寛斎が江湖詩社を結盟する気持ちを表わしている。特に下線のところには、自分が世間の官職への追求を諦め、世間外の青雲に従って遊ぼうとする志向が読み取れる。「矢倉新居の作」と「源温仲先生に与ふ」とを照らし合わせると、江湖詩社の性格は一層明瞭であると考える。つまり、反儒者的な民間的（庶民的）な思想に育てられた詩社である。そのため、江湖詩社の重要な旗手としての柏木如亭も反儒的な庶民的な思想を持つ可能性が高いと言えよう。

３、風俗詩

江湖詩社は最も有名なのは竹枝詩の創作である。それは、明らかに儒教的な漢詩観への対抗であるとみられる。市河寛斎の「北里歌」を初めに、柏木如亭の「吉原詞」も作られて、世に聞こえた。葛西因是が書いた『如亭山人稿初集』葛の序文に「余與山人相識三十年，其人世為官匠，少不事生產，放情于煙花風月，混跡于遊俠俳優，喜友真率灑脱之人，寇視修邊幅之徒，意之所適諧謔竟日」とあるように、如亭はよく遊里に遊び、歳になっても遊治少年のようである。如亭の「吉原詞」が都会人らしい感覚と纏綿たる情趣をよく表現しているといえよう。

金蓮嬝嬝弄軽柔。日暮香風趁歩稠
満面桃花春似海。迎郎笑入小迷楼

如亭の最後の随筆集『詩本草』に「余少時嘗堕在酒肴山于北里之中、作吉原詞三十首、頗為同臭所賞、後不復作此種詩、糊口四方、藁亭散落、不復知近日都知属阿誰也、追憶往事、亦遊仙枕上一夢哉、今録所記者二十首以附巻末」と述べた。『唐宋伝奇』には「遊仙窟」という遊里での艶情な物語があり、「遊仙枕」はおそらくその物語を意識して書かれたのであろう。如亭は「吉原詞」の中に描かれている夢みたいな少年時代遊里の歳月が懐かしく思っているようである。上述した二首の吉原詞は非常に写実的に遊里の情景を再現させた。「金蓮」とは、「歩歩生蓮」という南斉藩妃の故事に依り、美女の足を指す。「満面桃花」とは、美女の顔。崔護の「人面不知何處去、桃花依舊笑春風」という故事を踏まえたと考えられる。「迷楼」は隋煬帝が揚州の近くに建てた豪奢な生活をし、女色に耽る楼の名である。転じて、妓楼を指す。遊女たちは盛装して、柔らかく軽やかに歩んで、妓楼の前に笑いながら客を迎える都会風景を描いていた。都会人にふさわしい艶情のあふれる漢詩である。そのような艶情の漢詩は性情之中の風雅観に相応しくないものとして、当時の儒者に排斥された。江湖詩社も盟主市河寛斎でさえ「北里歌」の作者として知られて欲しくないし、知られると恥ずかしい気持ちがあるようである。中村仏庵（幕府御畳方大工棟梁）の『崑岡炎余』（竹枝作品集）によれば、『北里歌』出版後十余年、寛政十年（1798）に仏庵の求めに応じて『北里歌』を書き送った時、寛斎は次のような識語を付したという。

予、昔時、友人と詩を論じて云はく、詩に作るべからざるもの無し。只だその格を上下するに在るのみと。筆を走らせてこれを作るもまた一時の戯手なり。後に伝播し、やうやく広まり、図して上梓する者有るに至る。人をして汗赧やまざらしむ。

上述の寛斎は「北里歌」はただ一時の戯手であるという口実から、彼は完全に儒教の風雅詩観から脱出しなかった、あるいは寛斎自身の儒者意識が強く働いていたと読みとれる。寛斎は元々昌平黌の啓事役を務めていた儒者である。政権の更迭に波及され、やむを得ず辞職し、在野しながら江湖詩社を創造した。なので、柏木らの弟子より、寛斎の庶民的な性格はずっと薄かった。

しかも、後の寛斎はまた富山の藩儒として招かれ、さらに江戸に戻り、王侯貴族と交わり重用された。頼山陽が書い「如亭山人遺藁」の序文から窺える。

如亭山人死、故人美濃梁伯兎輯其遺詩、以続前編、々々多其在東時詩、而此全係出関後作、以余与山人周旋京畿日久也、来質請言焉、余諾而未果也、①昨得江戸河孔陽書、寄乃翁集刻新成者、閲之多与山人唱和者、山人与翁及詩仏五山二子、東人所並称、山人死先翁、而其集未刻、責在吾輩、乃取遺稿、挑燈読之、山人声容躍々欲出、因憶、往年河翁帰自長崎、余邂逅之備後、翁問余如山人何在、余悉説其漂泊屡空状、河翁愴然、有招之東帰之意、已而山人入江戸復不楽居焉、歴越信而再来平安、却担東郊一廃寺、余得報、時大雪、与其画友紀伯……②夫河翁諸人皆拠上遊交通王侯、声華意気足傾一時、而山人以一落魄羈人、与之斉名、亦可以見其才気矣、明謝茂秦亦以山人与諸名士並駆、而竟不為李于鱗所容、至与絶交、河翁憐才、非于鱗比、而山人之才雖謂茂秦亜可也、茂秦晩遭遇趙王、又得其姫人、以娯老、山人之福比茂秦更薄、亦可哀矣、…恐将罵曰咄田舎児敢為饒舌也
友人山陽外史頼襄撰并書于京寓之薔薇園東軒

下線②の部分から、寛斎は当時王侯と交遊して得意していたことが見られる。また、柏木と寛斎との不合も明らかに述べている。下線①には、寛斎は長崎から帰って備後で頼山陽から如亭の窮迫を知り、如亭に江戸へ戻ることを勧めたと述べた。この件について、如亭も漢詩一首書いた。『如亭山人遺藁巻二』に記録された。

「途中奉迎寛齋先生歸自長崎幕中」
燕去雁來無處從。偶然今日路相逢。君身本有雕梁屋。笑我蘆邊獨寄蹤[11]

揖斐氏の注によると、文化十一年（1814）9月22日に、長崎奉行牧野成傑に随行して長崎に遊んだ寛斎は長崎を発って帰路につき、10月末頃に駿河島田あたりで、如亭と邂逅したという。「雕梁屋」とは、立派な屋敷。ここでは、寛斎を立派な屋敷の軒下の燕に喩えている。「蘆邊」とは、蘆の生えている辺り。「蘆邊獨寄蹤」は、如亭自分を蘆邊に棲みつく雁に喩えている。要するに、如亭は自分が王侯と交わり、重要された寛斎と違い、卑俗だけど自由に生活できる雁こそ、自分なりの道であるという気持ちを表しように考えられる。民間の遊歴詩人こそ如亭の志向であることがここで洞察できる。一方、如亭の寛斎のような王侯と交遊し、儒者として重用される生活への軽視や反俗性も見られる。その根底に流れているのは庶民的な意識なのであると考えられる。また、「奉呈北山先生」の漢詩に反映された如亭と山本北山との関係もその通りで

[11] 揖斐高訳注『柏木如亭詩集2』（平凡社2017）162頁。

ある。

「奉呈北山先生」

鉄肝石胆喜君知。何数世間軽薄児。無奈詩魔妨素志。逢人愧問吉原詞。

揖斐高氏の注によると、「鉄肝石胆」とは、豪胆さ、またそれを備えた人物をいう。北山は孝経学者としても知られ、天明の飢饉に際しては窮民救済活動に立ち上がり、寛政異学の禁に対しては反対の声を挙げるなど、気骨のある儒者としても知られていた。「軽薄児」は「鉄肝石胆」と正反対で、遊里に遊び、経世済民の儒者精神を持たない俗人間という。ここでは、如亭は自分のことを言っている。如亭は遊里詩「吉原詞」によって世に聞こえたので、尾聯に「逢人愧問吉原詞」と書いた。山本北山は擬古格調派を反対し、性霊詩派を提唱したにもかかわらず、あくまで気骨のある儒者である。そのため、世俗の軽薄児であり、しかも「吉原詞」という艶なる遊里詩で有名になる如亭は、北山の前に慚愧に堪えない。尾聯の「愧」という言葉から、如亭は慚愧堪えない気持ちがあるというものの、「詩魔」という言葉から、実際は如亭が慚愧していないではないかと考える。『新漢語林』によると、「志」とは、志向と目標を立てるとの意味がある。用例として、『書経・舜典』に「詩言志」がある。また、『論語・為政』に「吾十有五而志于學」がある。つまり、「志」という語彙は儒教的な考えであると見られる。その「志」に対するのは「詩魔」である。要するに、如亭の詩は儒教の正道である「言志」に非ず、邪の「詩魔」である。そこで、如亭は儒教的な詩観から離れ、民間の遊歴詩人として貫く姿が現れている。

三、江戸から地方へ

１、地方詩壇との繋がり

如亭の生涯においては、漢詩人として関東から関西まで足かけて遊歴した。最も多いのは信越地方である。勿論経済的な観点から考えれば、信越は商業経済発展して富裕層が多くて、潤筆料は多くもらえる一方、寛政七年信州に於いては結成した晩晴詩社には多くの門人集まったが、その中でも木百年と高聖誕という二人の優れた弟子がいった。菊池五山は『五山堂詩話』巻一に「信中の詩学、如亭実に壇坫を開く。得る所の人才、数人に下らず。しかうして木百年・高聖誕の二子を以て翹楚と為す」と記している。木百年は本姓を三枝（さいぐさ）。祖父の代に土木工事の功績により飯山藩主から木舗の姓を賜ったことから、それを修して漢詩人としては木を名乗った。詩集に『静窓詩』（寛政八年跋刊）がある。『題木百年所居』という漢詩は如亭が蓮村の木百年の住まいに尋ねた時、百年夫婦に招待された時書いたものである。「不許尋春世人到、唯容漁夫宿桃源」という尾聯から、百年の住まいは世外桃源みたいな隠逸にふさわしい場所であり、如亭の隠逸心境も窺える。高聖誕は高梨聖誕（1774－1822）である。高は修姓で、名は魯、字は聖誕、号は紅葉である。詩集に『紅葉遺詩』がある。詩集の跋文に「高梨氏自扁書室曰紅葉

庵。其為人孝友存形象之外。信義在不言之中。不諂豪権。不軽寒士。是以家道轗壈。教授以給薄…」という記載がある。そこから、聖誕の家柄については詳細に知られないけれども、権門世家ではないことが明らかである。要するに、百年と同じく庶民階層に属していた。そこで、如亭の晩晴詩社の門人には庶民階層の人が多いと考えられる。

化政期になると、地方にはさまざまな詩社が登場した。中でも、注目すべきは桐生商人を中心に活動していた桐生詩壇である。桐生は日本有数の機業の町である。桐世詩壇の中心人物はいずれも運送業、醸造業、海運業、絹織物買次業などを営む富商である。佐羽淡斎はそのなかには最も重要な人物である。[12]佐羽淡斎は、絹織物の仲買商を営む桐生の豪商であり、詩仏の門人として熱心に詩作に取り組み、この地に桐生詩壇を形成しただけでなく、江戸文人たちのパトロンとしても知られた存在でもあった。如亭は桐生に遊歴した時、淡斎の所に寄寓し、彼らと交遊したことがある。如亭は淡斎の詩集『菁莪堂集』（文化十二年刊）に序文書いた。更に、『如亭山人遺藁巻二』に「淡斎詩三編」という漢詩が書かれていた。

清和時節雨新晴。北向初為毛中行。払拭柱杖旋出寓。芳草新樹一身軽。
来到桐郷出錦地。飽看山明水又媚。西商東買肩相擦。倚山臨水皆錦肆。
遊子非買段匹客。行李暫駐詩人宅。坐愛離外好風景。是晴是雨日清適。
君有詩巻本新鮮。捜奇得看第三編。驚嘆天孫機杼別。織出句句更燦爛。
可笑家家寒窓婦。飛梭転軸呵凍手。花様雖肖璀燦乏。光華富貴落君後。
我向世人普奉語。獲巻蔵者宜保護。一旦暴雷下雲間。驚風駭雨攫将去。

２、民間文学者との交遊

如亭は漢詩人といっても、俗文学者たちともよく付き合っている。江戸にいる時、洒落本の作者山東京伝と交遊していた記録がある。如亭は京伝の『傾城買四十八手』に批判語を書き入れたことがある。如亭の書き入れ本は後になると、京伝の弟京山に伝わって残した。京山はその書き入れ本『傾城買四十八手』に識語を書き付けた。

巻中に題する所の批判は、詩人柏如亭の自記なり。如亭、名は昶、字は永日、俗称は柏木門作、亡兄京伝翁の旧識なり。亡兄この書を作りし時、年三十たり。亡兄、如亭と烟花の断琴たり。故に没す。亡兄、如亭に先んじて泉下に在ること四年なり。青眼と紅顔と雙つながら空に帰す。たまたまこの書を閲して、泪襟に灑ぐ。

上述の「亡兄、如亭と煙花の絶琴たり」という一句から、二人は気が合う知己の交わりである

[12] 揖斐高『遊人の抒情―柏木如亭』（岩波書店 2006 年）284-285 頁参照。

ことが明白である。如亭は洒落本が好きだけではなく、芝居も好きそうである。新楽間叟（元幕府御徒）は『間叟雑録』（無窮会図書館平沼文庫蔵写本）に以下の内容を書いた。

> 痩竹（如亭）は劇場博士なり。むかし素人芝居といふものの名人にて、殊更桜田・金井が薀奥を得たり。ここに夏中、出雲崎にて地神諏訪明神の宮殿破壊に付、再建助力のため十日の芝居を興行せり。痩竹、役者となりてあてたり。我故に常に大唐伯虎と称してたわむれり。

桜田治助と金井三笑は、天明期江戸歌舞伎を代表する狂言作者として併称される二人である。痩竹は如亭の号である。間叟は如亭を劇場博士と呼ぶのは、如亭は出雲崎に遊歴した時に芝居の役者していたからである。また、如亭は自分が明朝の風流文人である唐伯虎と自称した。『間叟雑録』によると、如亭は俳諧者杜入との付き合いもある。

> 柏痩竹（如亭）はじめ信州善光寺に居て、字を売り教授を以て浪遊せり。去年戊午（寛政十年）の秋、微恙によって同国の野沢温泉に遊びたり。杜入といふ俳諧宗匠にあひて懇意になりたり。杜入曰、我は越後へあそんで下もの方浦原・新潟辺へ行なりと。痩竹も路纏なけれども伴ひゆかんとて、それより信濃川を船にて下りて新潟へ来たり、終に明年春まで新潟に滞留せり。故あって新潟を去って出雲崎へ来り、九月まで居たり。ここも又放遂せられて、又信州へ帰らんとす。不思議の事にて間叟と懇意になりたり。詩は上手なり。おしき才子也。放蕩と不遇にて今は雲水の一孤身となりたり。我はなはだかれをあわれにおもへり。

しかし、如亭のような俗文学者と交遊したり、芝居をしったりするような漢詩人は当時の伝統的な儒者に強く批判されていた。尾張藩の儒者秦滄浪は川内当々宛の手紙に、明らかに如亭が芝居することについて非難した。

> 如亭は越後にて戯場に出で浄をつとめ申由候。何様明の文人にも芝居をせし人も御座候へども、これは壮心を消耗せんとての事、壮心なき人は真の狂言師に御座候。詩人といはるる者の右体の事は痛心の至、その党の人も困り申すべく候。

儒者である秦滄浪は伝統的な儒教詩観を中心の考えでは、芝居は壮心（志）を亡くさせるので、詩人は芝居すべきではない。そこから、如亭は当時儒者詩人の枠を超えて、庶民階層や市井階層の代表としての民間詩人の姿はより明らかになったと思われる。

四、まとめ

18 世紀後半の漢詩壇には個人主義や現実主義に伴い、性霊詩派・宋詩風を提唱していた遊歴詩人が多く生まれたが、彼らは、二種類に分けられる。一方は元々儒者であり、寛政異学の禁のため、在野になって、已む得ずに遊歴詩人になったが、内心には儒者意識が根強く、徹底的に儒教詩観から抜け出せなかった漢詩人である。市河寛斎や山本北山らはそういう類型の詩人である。もう一方は、柏木如亭のような庶民階層や市井階層から登場した都市文化の自由人である。彼らは、伝統的な儒教の詩観に対抗しつつ、四方を遊歴するうちに、地方の町人や富農らと交遊しながら、漢詩文化を伝播していた。彼らの漢詩も強く庶民の性格を帯びている。江戸後期の歴史においては、彼らみたいな民間の遊歴詩人は非常に重要な席を占めていたと考えられる。